

# 戦後ドキュメンタリー映画の再発見：羽田澄子、勅使河原宏

ゼンテノ マーティン マルコス

## 要 旨

このレポートは2021年秋学期（2021年9月～12月）にCentre for Japanese Studiesの客員研究員として南山大学に滞在しながらの研究活動の報告である。南山大学在学中に行ったフィールドワークは、教育・普及活動に加えて、戦後日本のドキュメンタリー映画の再発見を中心としたもので、女性監督、羽田澄子の作品と勅使河原宏の初期の実験的ドキュメンタリー映画を研究した。羽田の研究は“Japanese Documentary Filmmaker Haneda Sumiko. Authorship and Gender Discourses”というプロジェクトの一部であった。英国および日本の機関から資金援助を受けた。私の研究は、羽田の作品の2つの側面を中心としている。第一には、岩波映画の社員として作った初期の仕事である。第二は、羽田の作品がいくつかの国境を越えたことに注目した。この研究は、羽田の映画の制作環境をめぐる著作の研究によって完成した。勅使河原に関するフィールドワークは、主に草月会館と慶應義塾大学アートセンターで行った。私の研究は、1950年代に制作された実験的なドキュメンタリーに焦点を当てたもので、戦後の前衛に関する議論の中で文脈化されている。この映画は、勅使河原の著書や国際的な前衛（特にスペインの前衛から）が受けた影響との関連を分析した。

キーワード：羽田澄子、戦後ドキュメンタリー、岩波映画、前衛映画、勅使河原宏

このレポートは2021年秋学期（2021年9月～12月）にCentre for Japanese Studiesの客員研究員として南山大学に滞在し、日本映画のコースを担当しながらの研究活動の報告である。その間、名古屋市内の3つの大学のセミナーで発表した。その2つは数年前から研究していたアイヌ民族の映画表現についての講義である。第一は2021年11月16日に名古屋大学で開催された映画研究セミナーで、“Representing the Ainu in Early Documentary Films”「初期のドキュメンタリー映画におけるアイヌの表現」と題された。それは、アイヌ民族をテーマとした初期のドキュメンタリー映画に見られる矛盾を中心にしたものだ。第二は2021年11月30日に南山大学で開催された「ドキュメンタリー映画におけるアイヌの表現：図像学と不在のイメージ」である。これはRobert Croker先生が担当されているComparative Sociology Seminarの一環として開催された。そこで自分の長編ドキュメンタリー *Ainu. Pathways to Memory* (2014) を紹介した。この作品は、マイノリティーの人々

の映画表現に関連する特定の問題を議論するために使用された。例えば「他者」を表現する方法、社会的に無視され続けてきた人々の声、図像の矛盾等に関して論じている。

第三の発表は「日本のドキュメンタリー映画のパイオニア女性：羽田澄子・ジェンダーの視点と多国籍映画」で、2021年11月25日に杉山女学園大学のパフォーマンスアーツセミナーで開催された。この女性監督、羽田澄子について名古屋で行った実地研修の暫定的な結果を発表した。さらに、南山大学のスペイン・ラテンアメリカ研究科の永田友成先生が担当しているスペイン文化のセミナーにも参加した。これは学生のプロジェクトのフィードバックという役割を担っていた。

## フィールドワーク

南山大学在学中に行ったフィールドワークは、教育・普及活動に加えて、戦後日本のドキュメンタリー映画の再発見を中心としたもので、女性監督、羽田澄子の作品と勅使河原宏の初期の実験的ドキュメンタリー映画を研究した。

このフィールドワークの目的は戦後の日本におけるノンフィクション映画の作者、種類、および制作方法についての洞察を深めることである。日本映画は世界で最も古く、多くの作品を残した産業の1つでありながら、ノンフィクションは、それに値する注目を集めていない。ドナルド・リッチーのような著名な学者は、日本には真のドキュメンタリーの伝統がないとさえ主張した (Richie 1990, 60頁)。それでも、1945年から2010年の間に130,000本を超えるドキュメンタリー映画が制作された (村山2010, 240-46頁)。この豊かな映画文化は、過去10年間に部分的にのみ探求されてきた (Nornes 2007; 村山2010; 丹羽美之、吉見俊哉2012; Centeno-Martin and Raine 2021)。

このように、フィールドワークの目標は戦後のドキュメンタリー映画を中心に、日本映画の知られざる側面を研究することである。パンデミック下にあって、ほとんどの外国の学者が日本で研究が不可能となった状況の中で南山滞在の間に、下記のような日本のノンフィクションに関する2つの進行中のプロジェクトを進めるのが狙いであった。

## 女性ドキュメンタリー作家 羽田澄子

近年、日本映画全般の歴史における女性監督の貢献は、ますます関心を集めている (池川2011; Laird 2013; González-López and Smith 2018)。しかし、日本のドキュメンタリー映画の歴史において女性の映画作家が重要な役割を果たしてきたという事実がありながら、これまで英語での出版物では取り扱われてこなかった。したがって、私の最初の仕事は、最も重要な日本の女性ドキュメンタリー制作者の1人である羽田澄子を再発見するこ

とであった。そのため日本語で書いてある資料を収集した。それにはほとんどが商業流通していない羽田の映画（1950年代の岩波映画プロダクションの映画から1970年代の独立として映画まで）も同時に映画制作に関する羽田の著作も見つけることが含まれていた。これは“Japanese Documentary Filmmaker Haneda Sumiko. Authorship and Gender Discourses”というプロジェクトの一部であった。英国および日本の機関から（笹川財団、国際交流基金、Birkbeck Research Committee Strategic Funds、BIMI（Birkbeck Institute for Moving Images）、Open City Documentary Film Festival Londonなど）資金援助を受けた。このプロジェクトには、一連のオンラインシンポジウムも含まれる（2021年7月と9月にロンドン大学SOASのJapan Research Centreで開催された）。次の映画では英訳と字幕も制作した「嗚呼満蒙開拓団」（羽田澄子、2008年、120分）、「法隆寺献納宝物」（羽田澄子、1971年、20分）、「村の婦人学級」（羽田、1957年、25分）。「村の婦人学級」は日本国外で初めて上映された。それにOpen City Documentary Festival Londonの協力を通じて羽田の「山中常盤」（2004年、100分）と「薄墨の桜」（1977年、44分）も2011年9月にロンドンで上映された。

私のフィールドワークは、1957年から2012年の間に羽田が監督した22の映画作品を見つけ出すこと、同時に1984年から2017年の間に羽田が出版した著作の所在を突き止めることだった。この原稿の中には羽田が映画で取り上げたトピックが入っている。例えば日本の歴史、社会、文化等である。すべての映画は様々な図書館、アーカイブ、商用版を通じて、または著作権を保持する配給会社および諸団体（岩波映像、カナタシャ、国立映画アーカイブ）での存在が確認された。このデータは日本、ヨーロッパ、米国の学者など計19人と共有されており、その研究の結果は、Centeno, Marcos, González, Irene, Armendariz, Alejandra (eds) *Haneda Sumiko Haneda Sumiko. Her Approaches to Gender, Culture, Society and Arts in Japanese Documentary Film*, London: Routledge (2023年予定)で出版する予定である。本書は、羽田澄子に焦点を当てた初の学術書となる。

私の研究は、前述した著作で議論されるが、特に羽田の作品の2つの側面を中心としている。第一には、岩波映画の社員として作った初期の仕事である。

私はこの会社が戦後のドキュメンタリーシーンの主要人物を育んだ映画学校になったことを研究していた（Centeno-Martin 2021, 2019b）。ここで、吉野啓治と羽仁進という二人の映画監督が社内で開発したドキュメンタリー手法を羽田がどのように取り入れていたのかを調べることであった。岩波で最もベテランの映画監督である吉野は、会社の若いメンバーを育て少数のチームでロケ撮影を行い、映画制作者が自分の興味を探求することが奨励される柔軟な環境作りを進めた（羽田2014：9）。羽仁は若い映画制作者でいながら、1950年代から監督の主観という問題に挑戦し、監督の代わりにカメラの前の主役たちの主観を撮ることに基づいて、新しいドキュメンタリー手法について理論化していた。

羽田は羽仁の助監督として働き、それが大きな転換点であったことを認めている（羽田2014：12）。私の主な研究対象は、羽田がその映画制作方法をどのように自らの作品に取り入れたのかを評価することであった。監督として岩波で作った最初と最後の作品：「村の婦人学級」（1957年）と「法隆寺献納宝物」（1971）の二つの映画を分析した。分析を強化するために、これらの映画に関する羽田の著作も収集した（羽田2010b；2012；2014：15-21、38-41；2017）。私の目標は羽田が岩波で開発されたドキュメンタリー手法がどのように更新したかを説明すること。そこで羽田が映画にジェンダーの視点、社会・文化・歴史における女性の位置という視点どのように加えたかを研究していた。

第二に、羽田の作品がいくつかの国境を越えたことに注目した。トランスナショナル・シネマは、最近私が出版している分野である（例えばCenteno and Morita 2020a, 2020b）。最初に「嗚呼満蒙開拓団」を調べていた。この映画は「中国残留孤児」を扱ったもので、主人公は、第二次世界大戦で日本が降伏してから、中国本土に取り残された人々である。これによりこの映画はディアスポリックシネマの特異な事例紹介になる。

名古屋滞在中に、私は羽田の日本の歴史に対する国境を越えた映画、2つの例を見出した。一つは「角屋七郎次郎の物語・ベトナムの日本人の町」（1995）である。これは1600年代初頭、ベトナムのホイアン市（会安市）という日本の町を築いた日系商人の足跡をたどる映画である。二つ目は「遙かなるふるさと一旅順・大連一」（2011）という自主映画である。この映画では羽田が退職後にこの中国東北部の故郷を訪れる。また、羽田の著作（羽田2002：104-114；2004；2010a；2011）の研究によって、このフィールドワークを完了した。

## 勅使河原宏の前衛ドキュメンタリー

私が研究していた日本のドキュメンタリーの2つ目の側面は、1950年代に勅使河原宏が制作したドキュメンタリーであった。勅使河原は、1960年代から制作された長編映画で、いわゆる日本ヌーヴェルヴァーグにおいて国際的な著名人となった。主に安倍公房の小説を映画化したものだ。しかし私は、海外にはあまり知られていない初期の時代の実験的なドキュメンタリー映画、そして当時の前衛運動に興味がある。

戦後文化界における初期の活動を文脈化するために、私は勅使河原の「前衛、主観性、芸術家の政治的関与、社会における位置、現実へのアプローチ、芸術の統合」への理論に関する著作を集めた（勅使河原1951、1958a、1959a、1962、1968、1978、2000a、2000b、2011、2018；勅使河原、野田、松本、羽仁1961；勅使河原、四方田、大河内2018）。それから勅使河原がこの概念を3つのドキュメンタリー映画にどのように取り入れたのかを調べた：「北斎」（1953年）、「生け花」（1957年）、「いのち—蒼風の彫刻」（1963年）。また、

勅使河原の著作や映画に見られる国際的な影響を分析していた。私はスペインの前衛芸術が勅使河原の作品に受けた影響に興味を持っている—主に映画監督のルイス・ブニュエル、画家のパブロ・ピカソ、そして最後にカタロニアの建築家アントニ・ガウディの作品だった。この点を説明するために、私は勅使河原の論文（勅使河原1958b、1959b、1979、1984、1990；勅使河原、ヨモタ、オコチ2018：128-135）を収集した。それに勅使河原のドキュメンタリー映画「ガウディ」（1984）を参考にした。勅使河原は父、勅使河原蒼風と共に1959年にカタルーニャに渡り、サルバドール・ダリやアントニ・タピエスなど、スペインの前衛芸術家を訪ねている。

映画や資料を収集するために主に草月財団の本部である草月会館で研究した。勅使河原宏の父が設立した草月財団は、勅使河原の大部分の作品を所蔵している。また草月アートセンターの出版コレクションを購入した慶應義塾大学アートセンターでも研究活動を行った。草月アートセンターでは勅使河原の実験映画も上映されており、このセンターは1958年から1971年にかけて活動し「草月シネマテーク」において映画シリーズを含む前衛芸術に関するイベントを開催した。また他の映画や資料を、関東地方と名古屋市のさまざまな図書館から収集した。

この研究の結果は、Centeno, Marcos and Torres, Lorenzo (eds) *ReFocus: The Films of Teshigahara Hiroshi*. Edinburgh: Edinburgh University Pressという本に掲載される予定である（2023年予定）。これは、勅使河原について英語で出版された最初の本になる。戦後の日本の前衛における勅使河原の役割と、あまり知られていない映画を調べて勅使河原への新しい包括的なアプローチを提案する。勅使河原の未翻訳の著作を含む当時の理論的議論、作家、芸術家、その他の映画制作者との複雑な協力のネットワークが文脈化される。そのために私のフィールドワーク中に収集されたデータの一部は、この出版に協力する日本、ヨーロッパ、米国の16人の学者とも共有されている。

## 参考文献

- Centeno-Martin, Marcos and González, Irene (Eds.) (2023), *Japanese Documentary Filmmaker Haneda Sumiko: Authorship and Gender Discourses*. Routledge.
- Centeno-Martin, Marcos and Raine, M. (Eds.) (2021), Special Issue “Developments in the Japanese Documentary Mode”, *Arts*
- 羽田澄子・長谷川和夫、著（1984）「高齢化社会の健康問題」和波書店 p. 37
- 羽田澄子（1986）『映画「痴呆性老人の世界」をつくって』伊東光晴 [ほか] 編。「老いのパラダイム」。岩波書店 pp. 61-82
- （1992）Interview by Mark Nornes “Documentarists of Japan Series: Haneda Sumiko”, *Documentary Box* Sept 1992 pp. 9-13
- （2002）『映画と私』晶文社
- （2004）『転職の足』中見立夫 [ほか] 著。「満洲とは何だったのか」藤原書店

- (2007) Interview with Takano Etsuko 「映画に生きる女性たち」 Tokyo International Women's Film Festival
- (Ed.) (2009) 「終わりよければすべてよし」 岩波書店
- (2010a) 「嗚呼満蒙開拓団へたどり着くまで」
- 佐藤忠雄 (編集) (2010) 「シリーズ日本dのドキュメンタリー 2. 政治・社会編」 岩波書店 pp. 58-60
- (2010b) 『教室の子供たちの頃工藤満のインタビューまで』。
- 忠雄 (編集) (2010) 「シリーズ日本dのドキュメンタリー 3. 生活・文化編」 岩波書店、pp. 178-188
- (2011) 『なぜ今・遥かなるふるさと 旅順・大連』 「遥かなるふるさと旅順・大連」 岩波ホール pp. 8-9
- (2012) 『村の婦人学級ができています』 丹羽美之、吉見俊哉編 「波映画の1億フレーム」 東京大学出版会 pp. 239-254
- (2014) 「私の記録映画人生」 岩波書店
- (2017) 『撮影対象と信頼関係をつくる』 金子遊、羽仁と他 (編集.) 「ドキュメンタリー映画術」 論創社
- 池川玲子 (2011) 「『帝国』の映画監督坂根田鶴子：『開拓の花嫁』・一九四三年・満映」 吉川弘文館
- 村山英雄 (2010) 「記録映画の保存と現状」 佐藤忠雄編 『シリーズ日本のドキュメンタリー 4. 産業・科学』 岩波書店
- Nornes, Abé Mark (2007). *Forest of Pressure: Ogawa Shinsuke and the Postwar Japanese Documentary*. University of Minnesota Press
- 勅使河原宏 (1958a) 「映画における実験」 『現代芸術』 1958・十月号
- (1958b) 「ものには足を」 *Cinéma 58*、第六号
- と他 (1958) 『東京 一九五八』 映画批評。第3：71-83
- (1959a)、「人間とその多様な表現形式」 『通残ジャーナル』、vol 17 no 3：86-92
- (1959b)、「ガウディ撮影記」 『芸術新潮』 vol. 10 no. 8：139-142
- (1961) 「芸術の場所」 『草月』 1951年・6月号
- et al. (1961) 「記録映画と劇映画」 『新日本文学』 vol. 16、5-1961
- (1962) 「私の映画の創りかた」 『生協ニュース』、vol. 144、16 Nov 1962
- (1968) 「映像に憑かれた一四狼」 『湖』 vol 101、1968年十月
- (1978) 「瓦礫と灰—敗戦前後」 『草月』 vol 26、2-1978
- (1979) 「押し上げてくる塊。歌舞伎・ピカソ・映画そして陶芸」 『草月』 vol. 123、1979年3月
- (1984) 「ガウディへの路程」 『美術手帖』 vol. 12 no. 536：24-26
- 勅使河原宏〔ほか〕著 (1989) 「前衛調書：勅使河原宏との対話」 学芸書林
- (1990) 「記録映画こそわが心の故郷」 『日経産業新聞』 1990年7月7日
- (2000a) 「ここに発見するもの」 勅使河原蒼風と勅使河原宏 『寸刻の美』 人間者 118-119頁
- (2000b) 「伝統と創造」 通残ジャーナル vol 33 no. 12：56-59
- (2011) 「勅使河原」 岡本敏子著 『岡本太郎の友情』 青春出版社
- (2018) 「前衛とルポルタージュ絵画」 柴橋伴夫著、『前衛のランナー：勅使河原蒼風と勅使河原宏』。藤田印刷エクセレントブックス 199-228

- 友田義行責任編集（2021）「素晴らしい映像作家シリーズ 勅使河原広」宮帯出版社  
———（2012）「戦後前衛映画と文学：安部公房×勅使河原宏」人文書院  
鳥羽耕史著（2010）「1950年代：「記録」の時代」河出書房新社  
柴橋伴夫著（2018）「前衛のランナー：勅使河原蒼風と勅使河原宏」藤田印刷エクセレントブックス

## Rediscovery of Postwar Documentary Films: Haneda Sumiko and Teshigahara Hiroshi

Marcos CENTENO-MARTIN

### Abstract

This is a report of the research activities I conducted during my stay at Nanzan University as a visiting scholar at the Centre for Japanese Studies (CJS) in the 2021 Fall Semester Semester (September–December 2021). The fieldwork conducted while I was at Nanzan revolved around the rediscovery of postwar Japanese documentary film by focusing on two aspects: the works by the female director Haneda Sumiko and the early experimental documentary films made by Teshigahara Hiroshi, who was later known as a key figure of the Japanese New Wave. The study of Haneda is part of a project entitled 'Japanese Documentary Filmmaker Haneda Sumiko. Authorship and Gender Discourses,' which was funded by British and Japanese institutions. My research focused on two aspects of Haneda's oeuvre: the new documentary method developed at Iwanami Productions, and the transnational dimension of her films. I completed this research with the study of Haneda's writings which revolve about the production circumstances of her films. My fieldwork on Teshigahara was mainly carried out at Sogetsu Kaikan and Keio University Art Center. My research focused on his experimental documentaries made in the 1950s which are contextualised within the postwar discussions on avant-garde. These films are also examined in relation to Teshigahara's writings and international influences Teshigahara had, particularly from the Spanish avant-garde.

**Keywords** : Haneda Sumiko, post-war documentary, Iwanami Eiga, avant-garde film, Teshigahara Hiroshi.